

## Dīpaṃkaraśrījñāna に帰される vidhi 文献について(2)

望月 海慧

### はじめに

本稿は、『宗教学研究』所収の先行研究の補遺である<sup>1</sup>。そこでは、チベット大蔵経のテンギュル「中観部」と「雑部」に所収される Dīpaṃkaraśrījñāna (Atiśa) の著書から小部の儀軌を説く文献を 5 点取り上げ、その内容を簡単に紹介した。

1. 『罪過懺悔儀軌 (*Āpattideśanāvidhi, lTung ba bshags pa'i cho ga*)』 Tr. dPal mar me mdzad ye shes, Tshul khirms rgyal ba. D. No.3974, Gi 255a3-b2; P. No. 5369, Khi 297a4-b7.
2. 『読誦読経前行儀軌 (*\*Adhyayanapustakapāthanapuraskriyāvidhi, Kha dog dang glegs bam klag pa'i sngon du bya ba'i cho ga*)』 D1. No. 3975, Gi 255b3-256a2, D2. No. 4487, 38b3-39a2, P1. No. 5376, A 304b6-305a8, P2 No. 5401, Gi 48a4-b4.
3. 『波羅蜜乘軌造作儀軌 (*\*Pāramitāyānasañcakanirvapaṇavidhi, Pha rol tu phyin pa'i theg pa'i tsha tsha gdab pa'i cho ga*)』 D1. No. 3976, Gi 256a2-b1, D2. No. 4488, 39a2-b2, P1. No. 5373, Khi 301b2-302a5, P2. No. 5401, Gi 48b4-49a5.
4. 『超世間七支儀軌 (*Lokātītasaptāṅgavidhi, 'Jig rten las 'das pa'i yan lag bdun pa'i cho ga*)』 Tr. Dīpaṃkaraśrījñāna, Śākya blo gros. D1. No. 2461, Zi 135a6-b7, D2. No. 4486, 38a3-b3, P1. No. 3289, Tshi 169b5-170a8, P2. No. 5399, Gi 47b2-48a4.
5. 『一切業障摧破儀軌 (*Sarvakarmāvaraṇaviśuddhikaravidhi, Las kyi sgrib pa thams cad rnam par 'thag par byed pa'i cho ga*)』 Tr. Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khirms rgyal ba. P. No.5874, Nyo 475a8-476a7.

<sup>1</sup> 望月 2007b. テキストの概要については、同論を参照のこと。

最初の4論は「中観部」で最期のものが「雑部」である。これらの儀軌文献は「秘密疏部」以外に収録されており、テンギユルの編者により顕教文献と把握されていたことになる<sup>2</sup>。

また、前稿では言及できなかったが、その他にも vidhi に関する2つの文献があり、「中観部」と「雑部」に収録されている。

6. 『発心律儀儀軌次第 (*Cittopādasamvaravidhikrama, Sems bskyed pa dang sdom pa'i cho ga'i rim pa*)』 Tr. Dīpaṃkaraśrījñāna, dGe ba'i blo gros. Rev. dPal mar me mdzad ye shes, Tshul khriims rgyal ba. D1. No. 3969, Gi 245a2-248b2, D2. No. 4490, 40a5-43b5, P1. No. 5364, A 284a1-288a6, P2. No. 5403, Gi 50a1-54a5.
7. 『業障清淨儀軌疏 (*Karmāvaraṇaviśodhanavidhibhāṣya, Las kyi sgrib pa rnam par sbtong ba'i cho ga'i bshad pa*)』 Tr. Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khriims rgyal ba. D. 4007, Ji 184a3-198b6, P. No.5508, Ji 236a8-242b7.

この2論は、それぞれ儀軌次第と儀軌解説とタイトルに付されているので、直接的に儀軌を提示するものではない。前者は「中観部」と「小部集」に収録され、発菩提心と律儀について先行する Nāgārjuna と Bodhibhadra の儀軌文献を引用するものであり<sup>3</sup>、後者は「経疏部」に収録され、『三蘊経』に説かれる懺悔の儀軌を解説したものである<sup>4</sup>。

さらに、テンギユルの「秘密疏部」には、次の儀軌文献が収録されている。

8. 『供物儀軌 (*Balividhi, gTor ma'i cho ga*)』 D. No. 1295, 185b1-187a5, P. No. 2418, Zha 585a4-587a7.
9. 『一切業障摧破曼荼羅儀軌 (*Sarvakarmāvaraṇaviśodhananāmamaṇḍala-vidhi, Las kyi sgrib pa thams cad rnam par 'joms pa zhes ba ba'i dkyil 'khor gyi cho ga*)』 Tr. Mar me mdzad, Rin chen bzang po. D. No. 2655, Ju 308b1-309b3, P.

<sup>2</sup> ただし、*Lokāṭītasaptāṅgavidhi* は「秘密疏部」にも収録されている。このような伝承をもつ文献は、他にも *Caryāgīti* (D1. No. 1496, D2. No. 4474, P1. No. 2211, P2. No. 5387), *Saṃsāramanoniryāṇīkārasaṃgīti* (D1. No. 2313, D2. No. 4473, P1. No. 3152, P2. No. 5386), *Dharmadhātudarśanaḡīti* (D1. No. 2314, D2. No. 4475, P1. No. 3153, P2. No. 5388), *Samādhisambhāraparivarta* (D1. No. 2460, D2. No. 4485, P1. No. 3288, P2. No. 5397) がある。Cf. 望月 2007.

<sup>3</sup> 望月 2014.

<sup>4</sup> 望月 1999, 望月 2005: 115-121. その内容な *Triskandhakasūtra* (or *Upāliparipṛcchāsūtra*) に対する注釈書である。

No. 3479, Gu 339a7-340b7.

10. 『護摩儀軌 (*Homavidhi, sByin sreg gi cho ga*)』 D. No. 2659, 311a7-b7, P. No. 3483, Gu 343a4-343b7.
11. 『五制多建立儀軌 (*\*Pañcacaityanirvapaṇavidhi, mChod rten lnga gdab pa'i cho ga*)』 D. 3074<sup>5</sup>, Pu 171b3-171b6, P. No. 3899, Tu 190b3-191a8.
12. 『無垢頂髻陀羅尼儀軌 (*\*Vimalo~ṅī~adhāraṇīvidhi, gTsug tor dri ma med pa'i gzungs kyi cho ga*)』 D. No. 3082, 177a6-b6, P. No. 3901, Tu 192a2-b3<sup>6</sup>.
13. 『甘露生供物儀軌 (*Amṛtodayabalividhi, bDud rtshi 'byung ba'i gtor ma'i cho ga*). Tr. Dīpaṃkaraśrījñāna, dNgos grub. D. No. 3778, Tshu 212b4-220b3, P. No. 4596, Nu 429b1-438a7.
14. 『水供物儀軌 (*Peyotkṣepavidhi, Chu gtor gyi cho ga*)』 Tr. Dīpaṃkaraśrījñāna, Tshul khirms rgyal ba. D. No. 3779, Tshu 220b3-221b2, P. No. 4860, Zu 169a7-170a4.
15. 『龍供物儀軌 (*Nāgabalividhi, Klu gtor gyi cho ga*)』 Tr. Rin chen bzang po. D. No. 3780, Tshu 21b3-222a6, P. No.4598, Nu 439b1-440a6.

また、デルゲ版とチョネ版には欠けているものの、次の儀軌文献もある。

16. 『供物供養儀軌 (*\*Balipūjavidhi, gTor mas mchod pa'i cho ga*)』 Tr. Rin chen bzang po. P. No. 4631, Pu 135b1-140b1.
17. 『堆薪儀軌 (*Citāvidhi, Tsha tsha'i cho ga*)』 Tr. Dīpaṃkaraśrījñāna, Zla ba'i 'od zer. P. No. 4868, Zhu 177b4-178b5.
18. 『護摩儀軌(*Homavidhi*)』 P. No. 4861, Zu 170a4-171a5.

これらの内容についての詳細は別稿において論じるが、儀軌を説く文献は概ね真言乗の文献として認識されていたことがわかる。それ故に、最初の5書が顕教文献とも認識されていた理由を考察する資料として、第1のもの<sup>7</sup>を除く4つのテキストの和訳を提示する。

<sup>5</sup> ただし、デルゲ版は著者情報を欠く。

<sup>6</sup> D. No. 3081, Pu 176b4-177a6, P. No. 3900, 191a3-192a2 も同タイトルの異本であるが著者名を欠く。

<sup>7</sup> 望月 2005: 121-122.

## 『読誦読経前行儀軌』和訳

### 『読誦と読経の前行の儀軌』

仏と菩薩のすべてに敬礼をする。

最初に、まず、法の読誦をなすことを望み、経巻として作られたものを読むことを望む菩薩は、十方の世間界のすべての仏と菩薩に請願して、心であらゆるものを把握し、菩薩摩訶薩の普賢行願讃の儀軌による帰命などの七支の在り方としての諸供養で正しく供養をする。それに続いて、一切の衆生に対し慈愛の心を設定し、正しい意樂でそのように思ってから、言葉を三度述べるべきである。すなわち、

世尊がお説きになられた法の一語の意味が、一切法であります。しかし、私は自分の業の罪過により智恵が少なく、理解力が弱っています。その通りであったとしても、世尊の經典を把握してから、それにより自分で読誦をして、その法の声は衆生の耳を通して聞こえ、如来の信頼を獲得できますように。

世尊がお説きになられた法の一語の意味が、一切法であります。しかし、私は自分の業の罪過により智恵が少なく、理解が弱っています。その通りであったとしても、自分で經典として作られた法を読経して、その法の声は衆生達の耳を通して聞こえ、如来の信頼を獲得できますように。

と三度述べるべきである。

『読誦読経の前行の儀軌』[という] 規範師で大賢者である *Dīpaṃkaraśrījñāna* の著作を終わる。

## 『波羅蜜乘軌造作儀軌』和訳

インドの言葉で、*Pāramitāyānasañcakanirvapaṇavidhi*

チベットの言葉で、『波羅蜜乗の仏像を作る儀軌』

仏と菩薩のすべてに敬礼をする。

世尊、ヴァイローチャナ光王、如来、阿羅漢、等正覚に帰命する。同じく、  
オーン、忍耐があり、等しく、静静で、増益し、非難なく、高く響き、光り  
輝き、美麗で、偉大な輝きをもち、岸を去り、涅槃された、すべての如来よ、  
心髄よ、守護尊よ、守護女尊よ、幸あれ。(namo bhagavate / vairocānāya /  
tathāgatāya / arhate samyaksaṃbuddhāya / tadyathā / om sukṣme same samaye /  
śānte dānte asamārope anālaṃbhe / taraṃbhaya śobati mahāteja / nīrakule /  
niribaṇe / sarvabuddha-adhiṣṭhāna-adhiṣṭhite svāhā)

このダラニを泥の上や砂の上で 21 度唱えて、塔を作るべきである。その塔に微塵の数ほどもある十万の塔が作られる。微塵の数ほどもある天と人たちの円満な生を得るであろう。誰かがどこかに生まれる場合、[前] 生を憶えているだろう。速やかに無上等正覚において明らかな悟りを得るであろう。

最初に泥を捏ねて、自分や他者に対する慈愛と悲心により菩提に心を起こし、捏ねるべきである。それから粘土の塊を加持し、究竟におられる世尊・ヴァイローチャナ光王・如来・阿羅漢で等正覚に帰依することを思い、真言の数を前と同じように述べる。それから縁起の真言を唱えて、型に入れるべきである。

それから穀物や花に対し縁起の真言が 3 度か 7 度唱える。それから、

この福德によりすべての見えるものを得てから、罪過という敵は制圧され、  
老・病・死の波の中で乱す存在という湖から有情を引き上げなさい。

と誓願をきなさい。

『波羅蜜乗の仏像を作る儀軌』[という] 規範師で大賢者の *Dīpaṃkaraśrījñāna* により著されたものを終わる。

om ye dharmā hetuprabhā hetdunteṣān tathāgato hyabadat / teṣāṃ ca yo nirodha evaṃ  
bādī mahāśramaṇa //<sup>8</sup>

<sup>8</sup> 本論は、Skilling 2008: 260 に英訳がなされている。

## 『超世間七支儀軌』和訳

インドの言葉で、*Lokāṭītasaptāṅgavidhi*

チベットの言葉で、『超世間七支儀軌』

仏と菩薩のすべてに敬礼する。

吉祥なる金剛薩多に敬礼する。

帰依処と、帰依をなすことと、帰依者は、いつも異なるものと把握されない。それがここでのマントラの帰依であり、「金剛の帰依」と述べられている。[1-4]

供養処と、供養をなすことと、供養者は、いつも種々なるものと把握されない。それが偉大な供養であり、「金剛の供養」と述べられている。[5-8]

懺悔されるものと、懺悔することと、懺悔者は、いつでもヨーガ行者により見られない。自性が清浄で真実を見るそれが、ここでの懺悔の最高である。[9-12]

随喜されるすべてのものと、自分と、随喜そのものは、ヨーガ行者により等しく見られない。[それが、]正しい随喜である。[13-16]

幻による変化した仏には、幻により変化した身体が備わっているので、こだまのような諸法が説かれることを正しく請願する。[17-20]

変化したものと同じものに掌を合わせてから、お願いして、金剛瑜伽を等しく見て、請願の最高を求める。[21-24]

涅槃された諸仏が生死を変化するように、衆生を変化させるために、入ることを請願するそのことを知り、出世間するので、それがここで再高の請願と認められる。[25-30]

所縁をともなうものとして働くすべてのものは世間のものである。円満な菩提は夢に似て、真実を知ることにより夢に似ていることを知る。夢のような存在に住しているのである。[31-35]

衆生たちに利益をなそうとすることで法界のように無量な一切の善を完全に廻向するならば、それをここに廻向することは正しく、すべての仏により正しく賞讃される。[36-40]

『超世間七支儀軌』[という]偉大な軌範師 *Dīpaṃkaraśrījñāna* が吉祥なるサムイェの自然に成就した精舎で著したものを完成する。